

美術科における自己評価学力と有用感の分析

三根和浪・高橋 均*
(2003年12月3日受理)

An Analysis of Useful-feeling and Self-evaluated Achievements on Art Education in Junior High School :from Investigation to the Adult

Kazunami MINE and Hitoshi TAKAHASHI

Abstract. The purpose of this investigation was showing clearly what is required, in order to recognize junior high school art to be a useful subject. By it, it is shown clearly what is important for the Art Education in lifelong-learning date. Therefore, the investigation for an adult was conducted. As a result of analyzing results of an investigation, the following thing became clear : 1. Those who were investigated had liked Art, when they were the third-year students in junior high school. 2. Moreover, they thought that Art was useful in respect of sentiment, such as a rich alignment now. 3. In order for an adult to have a useful-feeling to Art, it was important at the time of the third-year student in a junior high school that the achievement of art is high. 4. It was still more important at the time of the third-year student in a junior high school to like art.

1. 問題

美術教育は、本当に人生のなかで役に立ってきたのだろうか。リード(1953)は古典的名著『芸術による教育』において、教育における芸術の重要性を述べている。また東山(1986)は美術教育の意義として①体験を豊かにし、実践する力を育てる②自己の内面を表出し、個性の確立をはかる③造形能力の発達を通して、諸能力の発達を促すく創造性を培うく事物を認識する力を深めるく手の巧緻性や表現技能や技術を育てるく美的感覚や感受性を陶冶し、豊かな情操を育てる④ものをつくる価値を学び、自然やものを愛する心情を育てる⑤文化遺産を生活に根づかせ、伝承・発展する、を挙げている。

このように、美術教育は人生においてさまざまな望まれる効果をもたらすのは事実であるし、またそれは学校での美術教育、つまり図画工作・美術科の教育においても同様である。しかしながら、学校の美術教育における教育効果は、一般の人々の高い評価を得ているとは言い難い状況にある。例えば中学校において、「主要」教科と呼ばれ重要

視される教科群がある一方、「周辺」教科などと呼ばれ軽視されがちな教科群もあり美術科は後者に属する実態はそのことの一部を物語っているだろう。

このような状況は、決して我が国に限ったものではない。アイスナー(1986)は「これまで、美術教育がアメリカの学校で教育課程の中心になったことは、ほとんどなかったし、また現在もそうではない。学校における実態と同様に、大部分のアメリカ人は、芸術を教育課程の中心的存在とみるよりは、むしろ周辺のなものとみている。」と述べており、アメリカ合衆国においても同じような実態があるようだ。

これらは、学校の美術教育が一般に「役に立つ」と考えられていないことの反映であるように思われる。もちろん、この場合の「役に立つ」とは、人生を豊かにするために役に立つのではなく、谷川(2002)が名付けた「18歳学力」に役に立つ、つまり「受験の役に立つ」ことが想定されたものであろう。

ミヤワキ(2003)は、「学校教育も教員が必要性を謳うのではなくて、世間の人々がなぜ学校教育

*広島大学大学院教育学研究科学習科学専攻

が必要であり、なぜ図工・美術教育が必要なのかを首肯させる手順が必要だと思うのです。」と述べ、学校教育は教員という専門職が考えることであって素人が教育のデザインをすることはとんでもないという考えに対して、「大衆の感覚」を大切にすることが必要であると指摘する。日本人の平均寿命が2001年には女性84.93歳、男性78.07歳になり、世界一の長寿国となった現在、21世紀は生涯学習の時代である。この時代に生涯にわたって美術の学習を続けられるようにするためには「美術科は役に立つ教科である」と、専門家としての教師だけでなく一般の人々にこそ認知される必要がある。そのために本研究では、次期教育課程の編成を見据えて、美術科という教科がどのように有用であると認知されているのかの実態を把握し、どのようにすれば有用であると感ぜられるようになるのかを明らかにすることが目的である。それはまさに、ミヤワキが指摘した大衆の感覚、世間の人々に図工・美術教育が必要であると首肯させる手だての一つとなろう。

2. 方法

本研究の目的を達するために、次のような調査を実施した。

調査の名称

本調査は「中学校期までの教科学習等に関する基本調査」と題する調査であった。

調査期間：

平成14年12月から平成15年2月までであった。

調査対象：

広島県、愛知県、山口県、北海道、福岡県に在住する、70才代までに該当する保護者2003名(男性612名、女性1355名、無回答36名)を対象とした。

調査内容：

調査においては質問紙を用いて、次のような質問を行った。

〈質問Ⅰ〉

質問Ⅰは被調査者の性別や年齢等の属性を問うものであった。

〈質問Ⅱ〉

質問Ⅱは被調査者の「中学校3年生時での各教科への好意や得意の程度、及び現段階(調査時点)での各教科に対する有用感(役に立ったという感覚)の程度などの教科イメージとその理由」を問

うものであった。

ここで調査の対象にした教科(科目を含む)とは、国語科、数学科、英語(外国語)科、理科、社会科、音楽科、保健体育科、美術科、書道、技術家庭科(家庭科)、技術家庭科(技術科)の11教科目であった。そのうち、本論文では、美術科に関して得られた回答を分析の対象とした(以下同)。

各教科への好意の程度については、「大好き」「好き」「なんとも」「嫌い」「大嫌い」の5件法で回答するよう求めた。

各教科の有用感の程度については、「大変有用」「有用」「なんとも」「有用でない」「全く有用でない」の5件法で回答するよう求めた。さらに、有用感を尋ねたこの質問に対して「大変有用」あるいは「有用」であったと回答した場合にのみ、「1:知識・理解・技能の面で」「2:ものの見方や感じ方考え方で」「3:思考力や判断などの知的能力で」「4:豊かな心などの情操面で」の4項目からその理由を選択して回答するよう求めた。この質問によって、美術科に対する有用感がどのような要因から形成されているかを把握することができるようにしたものである。また、この4項目は、複数回答が可能な選択肢であった。

〈質問Ⅲ〉

さらに質問Ⅲは被調査者の「各教科の学習内容についての中学3年生時と現在の自己評価学力」などを問うものであった。自己評価学力については、各教科において5つの学力を取り上げ、それぞれについての回答を求めた。美術科においては、それらは次の5項目であった。

1. 「美術の歴史(変遷)の理解」
2. 「ゴッホ等の具象作品を鑑賞する力」
3. 「ピカソ等の抽象作品を鑑賞する力」
4. 「絵を描いたり像をつくったりする力」
5. 「工作・工芸の作品をつくる力」

以上の5項目に対して、中学3年生時ではどの程度できていたか、また、現在ではどの程度できているかという自己評価学力を問い、「大変そう思う」、「そう思う」、「そう思わない」の3件法で回答するよう求めた。

学力に関しては、前述に明らかのように、中学3年生時についても現在についても、測定を行うのではなく、自己評価によって回答するよう依頼した。そのため、中学3年生時の評価は回想によるも

のである。美術科だけに限らず、学力についての定義は、さまざまな立場のさまざまな考えがあって定まらない実態があるが、本調査において取り上げた5項目については、美術科の「学習内容における基礎・基本」と考えたものを代表させたものである。そのため、achievementとしての学力、つまり学校において教える内容についての学びによる到達を想定して設定した。

本論文においては、調査によって得られた回答をもとに、次のような2つの分析を行うこととした。
分析1：中学3年時での「美術科への好意」、及び現在考える「美術科に対する有用観」と「美術科を有用であったと思う理由の分析」

最初に、被調査者の中学3年生時点での「美術科への好意」、及び現在（調査時点）での「美術科に対する有用観」を把握するとともに、「美術科を有用であったと思う理由の分析」を行うこととした。このことによって、美術科という教科が、義務教育課程の修了者にとって、どの程度の好意や期待、そしてどのような内容の好意や期待を持たれているかを把握する。

分析2：「美術科への好意、有用感、自己評価学力(中学3年、現在)間の関係」

「美術科への好意、有用感、自己評価学力(中学3年、現在)間の関係」の分析は、義務教育課程の修了者にとって、美術科に対する有用感がどのような過程を経て規定されるかを分析するために行う。分析の結果から、美術科が人生にとって役に立つ教科であり、存在する意義がある教科であると認知されるようになるためには、何が影響を与えているのかの因果が明らかになってくると考えた。

美術科や音楽科などの芸術系の教科は、特別な場合を除き受験教科からは除外されている。そのため、保護者などの一般市民の関心が高いとは考えにくい。実に現実的な話であるが、受験学力としての必要性が高くない実態を考えると、「好きこそものの上手なれ」の諺どおり、美術科に対する好意があればこそ、よりよく学習することにつながり、またそのことが結果として学力を高めることにもなり、その相互作用の中で美術科に対する価値付けが行われ、有用感を持つようになるのではないかと考えた。本分析においては、これらの過程を検証することにした。

3. 結果

分析1：

美術科への好意に関する回答

質問に対して無回答であった対象者数を除いたうえで、被調査者が中学3年生であった時点における、美術科への好意に関する各選択肢の選択比率を算出した。その結果をTABLE 1に示す。TABLE 1に明らかなように、「大好き」と回答した者は19.7%、「好き」と回答した者は28.0%であり、両者を合わせると、47.7%の被調査者が、中学3年時に美術科のことが好きであったと回答していた。

また、「嫌い」と回答した者は16.2%、「大嫌い」と回答した者は4.0%であり、両者を合わせると20.2%の被調査者が、中学3年時に美術科のことが嫌いであった。

美術科有用感に関する回答

質問に対して無回答であった対象者数を除いたうえで、調査を行った時点での、美術科有用感に関する各選択肢の選択比率を算出した。その結果をTABLE 2に示す。このTABLE 2に明らかなように、現在、美術科に対して「大変有用」であったと考えている者は8.6%、また「有用」であったと考えている者は35.8%であった。この両者を合わせると、44.4%の被調査者が、美術科に対して有用感を持っていることが明らかになった。

また、「有用でない」と回答した者は8.3%、「全く有用でない」と回答した者は、2.4%であ

TABLE 1 美術科への好意に関する各選択肢の選択比率

	度数	%
5 大好き	385	19.7%
4 好き	547	28.0%
3 なんとなく	627	32.1%
2 嫌い	316	16.2%
1 大嫌い	78	4.0%
計	1953	100.0%

TABLE 2 美術科有用感に関する各選択肢の選択比率

	度数	%
5 大変有用	166	8.6%
4 有用	691	35.8%
3 なんとなく	864	44.8%
2 有用でない	161	8.3%
1 全く有用でない	47	2.4%
計	1929	100.0%

TABLE 3 美術科を「大変有用」「有用」と回答した者の各選択理由度数

	有用な理由			
	知識・理解・ 技能の面で	もの見方や 感じ方考え方で	思考力や判断 などの知的能力で	豊かな心 などの情操面で
選 択	187	337	65	560
非選択	669	519	791	296
計	856	856	856	856
選択率	21.8%	39.4%	7.6%	65.4%

た。両者を合わせると、10.7%の被調査者が、美術科に対して有用感を持っていないことが明らかになった。

美術科を有用であったと思う理由の分析

美術科を「大変有用」及び「有用」であったと回答した者のうち、選択理由を回答していなかった1名の回答を除いた各選択理由度数をTABLE 3に示す。このTABLE 3に基づき、コクランのQ検定によって、理由間の比率の差の検定を行ったところ、有意な差がみられた($Q(3) = 644.78, p < .01$)。そこで、マクニマーの検定を用いて、Ryan法を適用した多重比較を行ったところ、4つの理由すべての組み合わせの間で有意な差がみられた($p < .05$)。

したがって、被調査者が現在、美術科に対して有用であったと考えている理由については、「豊かな心などの情操面で」を選択した者が最も多く、次いで「もの見方や感じ方考え方で」、そしてその次に「知識・理解・技能の面で」を選択した者と続き、「思考力や判断などの知的能力で」を選択した者が最も少なかったことが明らかになった。

分析2：

美術科への好意、有用感、自己評価学力(中学3年、現在)間の関係

まず、得られた回答のうち、中学3年時での美術科への好意について、「大好き」：5点、「好き」：4点、「なんとも」：3点、「嫌い」：2点、「大嫌い」：1点と得点化した。また美術科の有用感については、「大変有用」：5点、「有用」：4点、「なんとも」：3点、「有用でない」：2点、「全く有用でない」を1点、と得点化した。さらに、自己評価学力(中学3年時及び現在)については、「美術の歴史(変遷)の理解」、「ゴッホ等の具象作品を鑑賞する力」、「ピカソ等の抽象作品を鑑賞する力」、「絵を描いたり像をつくったりする力」、「工作・工芸の作品をつくる力」の5観点に

対する回答について、「大変そう思う」：3点、「そう思う」：2点、「そう思わない」：1点、と得点化し、その平均値を自己評価学力(中学3年、現在)とした。各変数の平均値および標準偏差をTABLE 4に示す。

次に、美術科への好意、有用感、自己評価学力(中学3年、現在)間の相関関係を明らかにするために、Pearsonの積率相関係数を求めた(TABLE 5)。TABLE 5で明らかのように、4変数間には、有意な正の相関があることが明らかになった。

美術科有用感への影響過程の分析

前述した仮説、つまり美術科に対する好意がよりよく学習することにつながり、またそのことが結果として学力を高め、その相互作用の中で美術科に対する価値付けが行われ、有用感を持つようになるのではないかという仮説とTABLE 5をふまえて美術科有用感への因果過程を明らかにするために、美術科への好意、自己評価学力(中学3年)、自己評価学力(現在)、美術科有用感から成る因果モデルを設定し、Amos4を用いてパス解析を行った。有意でないパスを削除し、標準偏帰係数を求めたモデルをFIGURE1に示す。適合度指標の値は、 $\chi^2 = 0.722, GFI = 1.000, AGFI = 0.988, AIC = 18.722$ であり、適合度に問題のないことが確認された。

分析の結果、相関関係のある美術科への好意(中学3年)と、自己評価学力(中学3年)とが、自己評価学力(現在)を規定し、それが美術科有

TABLE 4 美術科への好意、有用感、自己評価学力(中学3年、現在)の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
好意	3.44	1.10
有用感	3.40	0.85
自己評価学力(中3)	1.50	0.59
自己評価学力(現在)	1.49	0.58

TABLE 5 美術科への好意、有用感、自己評価学力(中学3年, 現在)間の相関

	好意	有用感	自己評価学力(中3)	自己評価学力(現在)
好意	—	.462**	.443**	.425**
有用感		—	.316**	.410**
自己評価学力(中3)			—	.563**
自己評価学力(現在)				—

注) ** $p < .01$

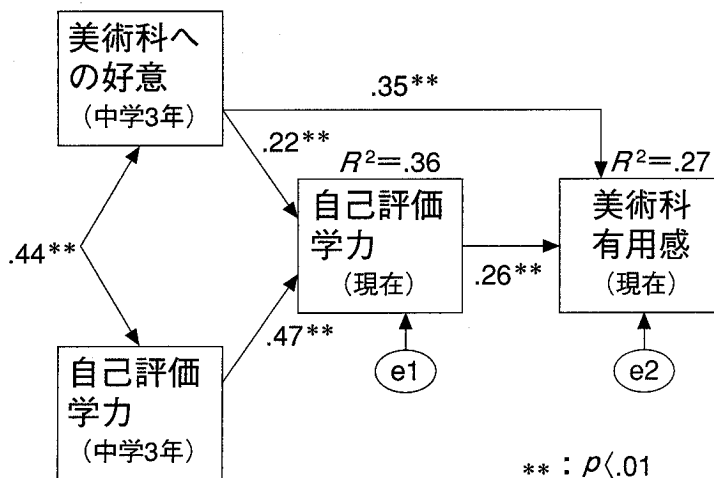


FIGURE 1 美術科有用感への影響過程を示すパス図

用感(現在)を規定することが分かった。また、中学3年時の美術科への好意は、直接、現在の美術科有用感を規定していた。

4. 考察

分析1:

この分析は、中学校美術科という教科が、義務教育課程の修了者にとって、どの程度の好意を持たれていたかを把握することが一つの目的であった。その結果、中学校美術科に対する好意は、「大好き」「好き」と回答した者を合計すると、約半分の被調査者が、中学3年時に美術科のことが好きであったことが分かった。これは、ベネッセ教育研究所(2002)が中学2年生2503名を対象にして行った、学習に関する意識・実態調査において「好きな教科」の第2位(49.3%)に美術科が支持された結果と一致している。また、「嫌い」及び「大嫌い」と回答した者は2割強であったことが分かった。理由はさまざまであろうが、中学校美術科は、概ね中学生の好意を得ていると考えて良いだろう。

次に、美術科がどの程度役に立ったと思われるかとその理由とともに把握することが2つ目の目的であった。調査の結果、美術科に対して「大変有用」「有用」であったと考えている者を合計すると、4割強の被調査者が、美術科に対して有用感を持っていることが明らかになった。さらに、「有用でない」、「全く有用でない」と回答した者を合わせると、1割強の被調査者が、美術科に対して有用感を持っていないことが明らかになった。

その理由を検討すると、美術科を有用であったと回答した被調査者のうち、実に6割強が「豊かな心などの情操面で」有用であったと考え、さらに4割弱が「ものの見方や感じ方考え方で」有用であったと考えている(複数回答可)。一般には、美術科は感性や情操を育てる教科として認知されており、その有用感とは、「心」や「感じる」といった点での評価がなされていることが明らかである。

これらの結果は、被調査者の大部分が戦後の美術教育を受けてきたこととも関係しているだろう

う。金子(1998)が指摘するように、戦後の美術教育は、学習指導要領に従って「占領下生活主義・実用主義美術教育時代」「創造・認識・造形主義美術教育時代」「系統的造形主義美術教育時代」「感性主義美術教育時代」と、その特徴に変遷がある。しかし、やはり一貫して表現に重点が置かれていたし、その中で感性や個性、情操などが重視されていたし、今日さらにその傾向は強まっている。今回得られた結果には、このような教育実践の歴史実態と今日の時代背景が反映されていると考えて良いだろう。

一方、知的能力で有用であったとした回答が最も少なかった点にも注目したい。これは豊かな心などの情操面を育てるという観点から評価されていることの裏返しであるとも言えるだろうし、一般的に認知されている美術科の特徴を良く表している。若元(2001)や佐々(2001)が指摘するように、美術教育においては「知」を育てることは可能であるし、また重要な部分として育ててもいるはずなのだが、それらが教科イメージとしては定着していないことを反映しているようだ。

このような実態をふまえて考えると、美術科は、感性や情操を育てる教科として独自性を強調すべきなのか、それとも知的な側面を育てることができる教科としてアピールすべきなのかといった点について、議論の分かれるところである。もちろん両極端を選択するというように単純なものではなく、両方が必要なのではあるが、1980年代のアメリカ合衆国では、後者を選択した。芸術教科が極めて軽視されがちな実態があることをふまえて、芸術教科を普通教育において「教科」として明確に位置づけされるようにするために、DBAE(Discipline Based Art Education: 学問に依拠した美術教育)という改革案を提示した。これは、学問性を鮮明にしながら系統性を重視して整備したカリキュラムであった。結果として、美術教育において教えることのできる「知的な」側面を強調していた。美術科が教科として生き残るための一つの方法がここに示された。

本調査において得られた回答は、これまでの美術教育がどのようなものであったのかを明らかにした回答ではあるが、美術科が有用であったと回答したうちの6割強が、豊かな心などの情操面で有用であったと考えている事実から転じて考える

と、美術教育に期待されていることは、知的能力を育てるということより、むしろ、感性や情操、心に焦点化した部分ではないかと思われる。

分析2:

この分析は、中学3年時での美術科への好意、現在の美術科に対する有用感、中学3年時の自己評価学力、現在の自己評価学力の間にどのような関係があるかを明らかにすることが目的であった。

FIGURE1からは、美術科有用感への因果過程について、相関関係のある美術科への好意(中学3年)と、自己評価学力(中学3年)とが、自己評価学力(現在)を規定し、それが美術科有用感(現在)を規定することが分かった。また、中学3年時の美術科への好意は、直接、現在の美術科有用感を規定していた。

つまり、中学3年時に美術科への好意が高(低)ければ中学3年時の自己評価学力が高(低)いし、逆に、中学3年時の自己評価学力が高(低)ければ美術科への好意も高(低)いのである。

また、中学3年時において美術科への好意を高めておくことや自己評価学力を高めておくことで、現在の自己評価学力が高まり、義務教育終了後も、美術科を有用と考えるようになることが分かった。

これらの過程をふまえると、美術科に対する有用感(現在)を持つようにするためには、中学3年時の美術科への好意、及び中学3年時の自己評価学力が果たす役割に注目しなければならないだろう。

そのため、中学3年時の美術の授業における心象表現学習では、「絵を描いたり像をつくったりすることができる」、美術鑑賞の学習については「ゴッホ等の具象作品やピカソ等の抽象作品を鑑賞することができる」、機能表現の学習については「工作・工芸の作品をつくることができる」、そしてさらに、美術史の学習については「美術の歴史(変遷)の理解をしている」などと自己評価できるようになることが重要である。これらは、いわゆる基礎・基本を確実に習得することで可能になることである。ローウェンフェルド(1963)は、13歳から17歳の時期を「決定の時期(創造活動にみられる青年期の危機)」と名付け、発達におけるその重要性に言及している。今回調査の対象となった中学3年時は、ちょうどこの時期に当たる。

その意味で、この中学3年という時期は、注目しなければならない時期である。ローウェンフェルドはさらに子どもの創造活動のタイプを視覚型、ハプティック型、中間型の3タイプに分け、それらのタイプに応じた指導が必要であると主張したが、あるべき美術科の指導をめざしてこの中学3年生の時期を大切にするためには、ローウェンフェルドの示した子どもの創造活動の3タイプの再確認が大きな示唆を与えてくれるように思われる。そのことで、義務教育終了後に高い自己評価学力を持つことができるようになり、そして美術科に対する有用感を持つことができるようになるだろう。

中学3年時に美術科に対する好意を持つようにすることは、さらに重要である。新しい学力観では、関心・意欲・態度などを学力の一つと捉え、生涯にわたって自ら学び、自ら工夫する学習が続けられることが望まれている。今回得られた結果は、美術科への好意(中学3年時)が、義務教育終了後にも生きて働いていることを示しており、それはまさに新しい学力感の効果を示していると言える。市川(1999)は、学力低下批判論者の和田と対談する中で、「音楽や図工や体育なども含めて、広くいろいろなものを体験して、どれが自分にとっておもしろいものなのかを探す機会を持ってほしい。」「音楽、図工、体育などについては、「好きでなければならない」と強制するのではなく、好きになれる可能性を探るためにやらせるものだと思っています。」と述べている。これらのことを大切にしつつ、これまで関心・意欲・態度などを重視してきた美術教育の歴史をいっそう進めなければならない時代が訪れている。そのことによって、美術教育は学齢期における価値だけでなく、義務教育終了後も生涯にわたって生きる意欲を持って日々を過ごすことができる価値をさらに付加し高めることができるようになると思われる。

参考・引用文献

○アイズナー, E. (仲瀬律久ほか共訳)『美術教

- 育と子どもの知的発達』黎明書房, p.12, 1986
- 市川伸一, 和田秀樹『学力危機 受験と教育をめぐる徹底討論』河出書房新社, 1999
- 金子一夫『美術科教育の方法論と歴史』中央公論美術出版, 1998
- 佐々有生「『芸術の知』の重要性と造形科の授業づくり」『学校教育』No.1012, 学校教育研究会, pp.12-17, 2001
- 谷川彰英「21世紀型の学力論の構想」, 『日本教科教育学会誌』第25巻第3号, pp.53-57, 日本教科教育学会, 2002
- 東山 明『美術教育と人間形成—理念と実践』創元社, 1986
- ふじえみつる「美術教育の今日的課題」, 花篤ほか編著『美術教育の理念と創造』黎明書房, pp.38-47, 1994
- ベネッセ教育研究所『第3回学習基本調査報告書・中学生版』ベネッセコーポレーション, 2002
同内容は同社のWebsite
<http://www.cm.or.jp/LIBRARY/GAKUSHU/CYU.HTM>
でも閲覧可能
- ミヤワキオサム「『想像世界』への旋回」『形FORME』No.271, 日本文教出版株式会社, pp.20-21, 2003
- リード, H. (植村鷹千代 訳)『芸術による教育』美術出版社, 1953
- ローウェンフェルド, V. (竹内清ほか共訳)『美術による人間形成』黎明書房, 1963
- 若元澄男「美術教育は「知の創造」に無縁ですか」『学校教育』No.1012, 学校教育研究会, pp.6-11, 2001

附記

本研究は、平成14年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)課題番号14380113 研究代表者:大槻和夫 安田女子大学教授)による「生涯学習の基礎基本を培うための教科教育の枠組みと内容の再編成」への助成を受けて実施された。